

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル: Association between antibiotic exposure during pregnancy and postpartum depressive symptoms: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル: 妊娠中の抗菌薬服用と産後うつ症状との関連について: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 千葉ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Research in Nursing & Health

年: 2025 DOI: 10.1002/nur.22442

筆頭著者名: 木阪 有美

所属 UC 名: 千葉ユニットセンター

目的:

近年、日本でも、妊産婦の死因で自殺が第一位になるなど、産後うつ対策は急務となっている。一方、抗菌薬服用による腸内細菌叢の変化がメンタルヘルスに影響するという報告がある。本研究では、母親の妊娠前から妊娠中の抗菌剤の使用と、産後うつの発生との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

65,272 組の母子を対象として、抗菌剤服用と産後うつとの関連を多重ロジスティック回帰分析により調べた。産後うつの状況はエジンバラ産後うつ病質問票で把握した。母親の年齢、学歴、世帯年収、婚姻、分娩歴、妊娠中の解熱鎮痛薬服用、消化器疾患、多胎、低出生体重、新生児の身体異常等の影響を除いて分析を行った。また、抗菌剤服用と妊娠中の精神的苦痛、産後うつとの関連についてパス解析を用いて分析した。

結果:

産後1ヶ月時点で12.3%、産後6ヶ月時点で10.1%の母親に産後うつ症状が認められた。妊娠中の抗菌薬内服と産後うつ症状(1ヶ月、6ヶ月)との関連を調べたところ、産後6ヶ月では、関連が認められたが(調整オッズ比 = 1.13, 95% CI [1.00, 1.26])、妊娠中の精神的苦痛の影響を除くと関連は見られなくなった。パス解析の結果、抗生剤使用は、産後1ヶ月及び6ヶ月時点の産後うつ症状に対して直接的な関連はないが、妊娠中の精神的苦痛の増加を介して、産後うつ症状が増えるという関係が見出された。

考察(研究の限界を含める):

これまでに、抗生剤服用が関連する産後うつ症状の増加は0.6~0.7%と見込まれ、弱い関連ではあるが、国内で年間100万回の出産があることを考慮すると、妊娠中の抗菌薬服用が関連する産後うつ症状は少なくない可能性がある。一方で、本研究では、抗生剤使用と、産後1ヶ月及び6ヶ月時点の産後うつ症状と直接的な関連がなかった。本研究の限界として、抗菌薬の種類や服用の原因疾患、服用方法や時期などの情報や、腸内細菌に影響を及ぼす可能性のある食事内容の情報が含まれていないことがある。今後はこれらの点を補強した更なる研究が求められる。

結論:

妊娠前・妊娠中の抗菌剤の服用が、妊娠中の精神的苦痛と関連し、産後のうつ症状につながる可能性が示された。妊娠中に抗生物質の投与が必要な場合の使用を妨げるものではないが、抑うつの兆候を示す妊婦に対しては、抗生物質使用後の医療提供者による観察や産後のフォローアップが産後うつ症状予防につながる可能性がある。